

界の使い

かごめ

界の使い

少しだけ開いていたキッチンの小窓から、ぬるい夜風が舞い込んだ。

その風と共に、私の目の前に男が現れた。

それは男だけれど、明らかに人間ではないと分かるので、ちっとも怖くなかった。

男は片膝をつき、私を見上げて言った。

「あなたにお伝えいたします。今すぐ首からその紐を外し、立っている椅子から降りるのです」
乾いてひび割れた唇は、まるで亀裂の入った大地のようだ。

その亀裂からチラリと覗いた口の中は、グラグラと燃えているかのように赤かった。

今にも溢れそうなマグマを連想して、私の鼓動は何故だか早くなった。

「誰？」

「私は界の使いです。あなたに生きよと。それを伝えるにここへ参りました」

男は淡々と言った。

その表情に説得しようとする情熱を感じないのは、まん丸の眼球に細長い瞳孔のせいだろうか。
感情が読み取れない。

「何の使いか知らないけど、ほっといてください」

「なりません」

男は立ち上がると、五本の指をいっぱい広げ、私にその手を差し伸べた。

「さあ、こちらへ」

「自分の命くらい好きにさせてよ」

「ならないのです」

「何でよ！」

「そう決まっているのです！」

男は大きな声で叫ぶと、足をダンッと踏み鳴らした。

部屋中に振動が伝わり、椅子がグラグラと揺れる。

椅子から足を踏み外しそうになって、咄嗟に首にかけている紐を外した。

「落ちる」と思った瞬間、男の手が私を抱えゆっくりと床へ着地させた。

まるで、水の中にいるような浮遊感だった。

瞬きをした次の瞬間、男はもういなかった。

私の足元に、小指ほどの大きさの切れた尻尾が残されていた。

その奇妙な体験の後、私は思い立って死ぬまでに見ておきたいリストを作った。

いよいよ最後の項目、バオバブの木を見にマダガスカルへ渡った。

そして、私はマダガスカルで見つけたのだ。あの時と同じ尻尾を持つトカゲを。

同行した現地ガイドによれば、今まで見たことのないトカゲだという。

専門機関に問い合わせた所、発達した趾下薄板があり、ヤモリの仲間であるらしいが新種とのことだった。

真っ赤に燃えるような口内をしているそのヤモリは、
正式にトカゲ亜目ヤモリ科のリストに登録されることとなった。
命名権があるので、私は迷わず『magma』と名付けた。

『ヤモリから狂犬病の特効薬』
マダガスカルに生息するマグマヤモリ（英名magma）の唾液から、
狂犬病の治療に効果が期待できる成分が見つかった。
現在、実用に向けて開発中である。

結局、マダガスカルから帰国した後も私は死ななかった。
数年後にこの記事を読んだ時、あの奇妙な出来事の意味が分かった気がした。
あの夜残されていた切れた尻尾は、今もここにある。

おわり

界の使い

<http://p.booklog.jp/book/111164>

著者：かごめ

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/yukiesan/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/111164>

電子書籍プラットフォーム：パプー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社トゥ・ディファクト